

講 演

念佛往生の教義の發達

(承前)

文學博士 望 月 信 亨

又私其の心を鏡であるとするれば——佛教にはそれを大圓鏡智と名けてゐるのであるが——その鏡が絶えず外界からの刺激で、埃や塵が一杯にたまつて汚されてゐる。これが吾々日常生活の實際の有様であるのであります。ところが今精神を統一して心一境性の三昧といふ状態になると外界からの刺激は全然杜絶されるのであるから、心の波は鎮まつて——全体的に鎮まるのではないけれど大なる波は鎮まつて——本性的にそれが湛然と澄み渡つて来る。又心の鏡は日々夜々に外界から吹きつけて来る塵埃からのがれて、そこに鏡の持前なる明るみがあらはれて来る。波がしづまれば月影が宿る如く、鏡のくもりが取れば物の姿がうつる如く、心が三昧の状態になれば肉眼では見るとの出来なかつた所謂靈境を觀見するのであります。

さて念は憶持して忘れないといふ意味で、それが進むと三昧になり三昧が進むと見佛する。この順序で佛敎のすべての修行が規定されてゆくのであります。三十七道品の中に五根五力といふのがあるが、五根とは信根、精進根、念根、定根、慧根で、五力とは信力精進力念力定力慧力をいふのであります。此五は悟りの根本になるものであるから無漏の五根と名けるのであります。その中、因果の理を信ずるのを信といひ、努力進取して止まないのを精進といふ。俗にお精進といふのは着を喰はぬとだと考へてゐるものが多いが、着を喰はぬとも悪くはありませぬが、併しそれは精進の本當の意味ではない。それから念といふのは前にいつた通り憶持不忘であり、定は即ち三昧、慧はその三昧によりて起される眞智をいふのである。私が前に念が進むと三昧になり、三昧が進むと朗然たる靈智が起つて見佛するといつたのは、念佛の修行も此無漏の五根の順序に依りて進んで行くものであると述べたに外ならぬのであります。それから又佛敎の三學である戒定慧の順序も、六波羅蜜の順序も施、戒、忍、進、禪、般若といふとありますが、禪に依つて起されたる眞實の智慧を般若といふ。般若は慧といふ意味でありますけれども、唯慧といふ世間の智慧と混合するから、般若といふ梵語を存して神聖といひますが、尊嚴といふ意味を證明してある。般若といふのは宇宙の眞理を見る智慧をいふ。宇宙の眞理を一切皆空であるとか、或は一切智、一切種智といふやうな宇宙の眞理を達観するを般若といふ。其般若は佛敎では所謂

俗智といふ世間の俗界の智慧ではないのです。第一義の智慧であります。第一義の智慧たる般若といふのは禪から起らなければ本當の智慧ぢやない、信、精進、念、定、慧でも定に依つて起つた智慧でなければ眞實といふものを見るには出来ない。佛を見るのでも定に依つて起されたる所でなくては、戒定慧でも本當の定に依つて起されたるものでなく、六波羅蜜の方にしても禪那の奢摩他止觀、靜慮に依つて宇宙を観察したものでなければ本當の眞實の智慧とはいへぬと斯ういふのが佛教の總てのものに書いてあるのでありますから、それで私は念佛の念の形式が念定慧と進むといふお話をしたのであります。念佛三昧、それが定です。念佛の念といふ意義並に其念が進んで三昧の状態を引起して來る有様は既に大略述べましたから、これから念佛の佛といふのは果してどんなものであるかを少しお話しして見たいと思ふのであります。念佛といふとは阿舍にも處々に説かれてゐるとであり、原始時代から其法が行はれてゐたとは、慥かである。阿舍の中に何か恐怖の感せられた場合には佛を念せよ、恐怖は即ち滅するであらう。若し佛を念せざれば法を念せよ、若し法を念せざれば僧を念せよ。三寶を念すれば恐怖は自ら滅するであらうと説かれてある。又阿舍の中には佛法僧の三寶を念すれば未來惡道には落ちず、必ず善處たる天上人中に生れるとが出來るといふとも説いてあります。斯の場合に佛を念じ法僧を念するといふのは、外道の教主やその弟子達を崇敬せず、佛陀釋尊の崇高なる人格並にその所説の教法及びこれを

修行しつゝある諸弟子達のとを憶念して始終忘れないといふのであつて、般舟三昧經に説いてゐる通り、若い男が女のとを思ひ、旅立してゐるものが故郷のとを想ふのと同様で、唯現實の生身佛を念するに過ぎぬのであります。一体佛教の教團に入りますには御承知の通り釋尊に歸依する、それが第一、釋尊の説かれた法に歸依する、それが第二、釋尊のお弟子に歸依する、それが第三、即ち佛法僧の三尊に歸依するといふことが佛教入門の規則で、それを三歸といふのであります。處がその三歸が進みますと遂には始終それを念じて忘れないといふ三念の行爲が起つて來るべきものであります。佛に歸順せずには佛教の教團に入る譯にゆかぬ、又佛の説かれる法、及び其處に居る御弟子達に歸順しないで佛教教團の一員となる譯にはゆかぬ。既に佛法僧の三尊に歸依して教團の一員となつた已上は更にその三尊を念じて常に忘れないやうにならなければならぬ。さすればこの三念は原始時代から佛教々團のいづれの間にも行はれた法とせねばならぬ。それから又六念といふ修行がある。これは佛法僧の三尊を念する外に更に施を念じ戒を念じ、天を念するのである。施を念するといふのは人に物を施すとを心懸けるとであつて、これは今日の所謂社會事業のやうなことをやるのである。釋尊は一般の在家に對し、特に富豪の徒に向つては、財を施せよといふことを頻りに説かれて居りますが、これは佛の本生譚に於ては菩薩の犠牲的に身を捨てるといふ話になり、大乘佛教も此考へから發達して來たと思はれるので、佛教

中、頗る重要な教義となつてゐる六波羅蜜の中でも施といふことが第一位に置かれてあつて、これが涅槃の彼岸に到る第一の行爲とせられてゐるのであります。それから戒を念するといふのは戒を堅く守つて、それを破つてはならぬと常に心懸けるをいふのである。天を念するといふのは死んで後に生るべき天國のよを念するのであります。此の六念は初めの五つを原因とし、それに依つて天に生れるといふ意味で、即ち涅槃に入るべき修行の出来ない在家の者の爲に説かれた生天の教義である。それから又八念十念といふ教義もあるが、併しそれ等の三念、六念、八念、十念の中で、そのいづれも第一が念佛であります。これは其等の諸念が悉く皆念佛を基礎とし、中心とするを證するのであります。今念佛往生の説といふのは、即ち此念佛の教義の發達したものと認めねばならぬ。蓋し原始時代に於ては釋尊の諸弟子は皆煩惱を斷じて諸業を造らず、涅槃に入らんことを目的としたのであるが、併し在家の優婆塞優婆夷は諸弟子の如く煩惱斷をすることが出来ぬ。そこで釋尊は六念等の法を修して天に生るべきことを教へられたのであります。淨土は小乗教の中では説かぬのであるから、自然在家の者に生天の法を教へられたのであるが、大乘佛教になると極樂淨土を始め諸佛の淨土が盛に説かれて來る、そこで生天の代りに淨土往生の説が唱へられ、遂に六念生天の教義が一轉して念佛淨土往生の教義となつて來たのはなからうかと想像されたのであります。

佛を念ずるといふことは最初は唯簡單に釋尊の生身を念ずるといふことでありましたが、佛入滅後になりますと、無論釋尊の生身は既に、涅槃に入つてしまはれたのでありますから、釋尊の持つて居られた所の功德法身、即ち十力四無畏乃至十八不共法等の功德法を念ずるといふことになつて來るのであります。前のを念生身佛と名けますれば、これは即ち念法身佛と稱すべきであります。

それから又斯様に佛身を念ずるのではなく、唯如來の名號を念ずるといふ所謂念名の教義のあるのであります。阿合の中に一寸氣が附きませぬが段々善く見て行きますと、釋尊の十號を念ずるといふことが處々に書いてある。これは名號の意義を憶念思惟するのであつて、口で唱へる稱名の教義とは區別されるべきものと思ふのであります。淨土三部經の中の阿彌陀經にも執持名號といふことが書いてありますが、普通に執持といふのを口で唱へる意味に解釋して居るやうでありますけれども、是れは阿合の念名の説から來たのではないかと思ふのであります。玄奘譯の稱讚淨土經には阿彌陀佛の功德を説くを聞いて、聞き已りて思惟すと書いて居ります。梵文の阿彌陀經には執持といふところに (Manṣikara) といふ字が使つてあります。これは作意又は思惟といふ意味の字でありますから、稱讚淨土經の聞已思惟と正しく一致するのであります。それから般舟三昧經にもまた當念我名と書いてありますが、これ等は皆念名往生の教義と名けべきものであつて、稱名と同視すべからざるものであります。

以上は先づ念の程度で、佛の生身又は功德法身を念じ、或は如來の名號の功德を念せしむるといふ法なのでありますが、處がさうした修行が段々進んでまゐりますと、今度は佛身の上の三十二相八十種好並に光明等を一々に念するといふことになつて來るのであります。即ち所念の對象に向つて仔細に觀察をこらし、遂にはそれを觀見しようと努めて來るのであるから、これは即ち前に述べた三味の範圍に入つて來たのであります。念の位では唯總體的に如來のことを憶念思惟して忘れないといふ程度に過ぎぬのであるけれども、觀察又は觀念となると、それが頗る微細の働きのなり、漸次奥深く徹底してゆくのであります。三十二相を感じるにしても初め無見の頂相から終り千輻輪相に至るまで一々に就いて善くそれを觀察し、而して單に一度や二度でなく順逆反覆して何十遍となくそれを繰返すのである。般舟三昧經などには唯佛身を觀念するにだけ述べられてあるけれども、觀經には極樂淨土の寶地から寶池寶樹寶樓閣及び觀音勢至等の諸菩薩までを觀察する法が説かれてある。天親の往生論には國土莊嚴十七種、佛莊嚴八種、菩薩莊嚴四種、總じて二十九種の莊嚴功德としてそれを觀察すべきことを勧めてゐる。即ち觀佛が擴張されて淨土及び菩薩聖衆までも觀念するやうになつて來るのであります。斯様に觀察を凝らし一心不亂に聖境を念じますと、遂には如來を見、淨土を觀見するやうになるのであります。處がさうした方法によりて觀見した如來といふものは果して何であらうかといふに、普通にはそれは極樂の阿彌陀

如來の姿が三昧定中に現はれたのであつて、これまで心眼が塞いでゐたから見るとの出来なかつた姿が、今心眼が開いた爲にそれを始めて見たのだと考へるやうであります。併しながら客觀的に佛がそこまで來られたとするのは餘りに單純な考である。般舟三昧經には定中見佛を夢に故郷に歸つて妻子に逢うたとに譬へてある。して見るとこれは吾が心の上に映つた影に過ぎぬといはねばならぬ。心の鏡がこれまで曇つてゐたけれども、今三昧の境地に入つて其曇りが取れた爲に佛の姿がその上に映つたものと見ねばならぬ、池の水が澄んだからして月影が宿つたのと同様であらう。それから又今一步進んで考へて見ると、心の上に映つたものは外界から來た影ではない。それは即ち吾が心の本來の面目が現はれたのである。吾々の心は如來藏心といつて、諸佛同體の本覺の如來であるけれど、無明妄染のせめに覆はれて迷の姿となつてゐるのである、それを今三昧の力で妄念を拂ひ除いて來ると、其處に自分の本性がはつきりと顯現して來る。その本性が果してどんな面目であるかといふと、驚く勿れそれは即ち如來の姿である。天空からの月影が映つたのではなくて、自分の姿を磨き出したのである。觀經の第八觀に諸佛如來は是れ法界身なり。一切衆生の心想中に入る。是の故に汝等心に佛を想する時、この心即ち是れ三十二相八十隨形好なり、是の心、佛となり、是の心是れ佛なりと説いてあるのが即ちその意味である。それから又此の觀念が今一段進んで參りますと、斯様に佛にしる、淨土にしる、いづれにしても具體的



な事象を認めてゐる間はまだ極致に達したのではない。想がある間は涅槃じやない、般舟三昧經にも有想は解脱でない、無想は是れ眞の涅槃であると説いてゐる。積念相續の結果として自分で一種のイメージを拵へ上げて、それを佛だとか淨土だとか勝手に見てゐるのであるから、眞の涅槃を求めるには其偶像を破らなければならぬといふのである。金剛般若經には色を以て佛を求め、三十二相を以て佛を求めべからず、三十二相を以て佛を求むるものは外道であつて我が弟子でないといふ説いてある。これは三十二相などを觀念しても、如來の眞實身をつかむとは出來ぬといふ意味である。斯ういふ風に觀念が段々と進んで來て、初め有想の色身佛を念するところから遂には念即無念の境地に入つて無相法身と合致せんとするやうになつてゆくのであります。

念佛の議論は随分長くなりましたで、此位の程度に止めて置きまして、これから稱名といふとを極簡單にお話しよう。稱名にはどうも俗信が多いやうに思はれるのであります、譬喩經等の中に沙漠を旅行をして水が無く、人々が皆渴死せんとした時南無佛と稱へると水が出て來た。或は航海中、難船をした時、船に乗つて居る者が一齊に南無佛と稱へた爲に暴風が止んだなどいふ話があります。法華經の中にも若人散乱心、入於塔廟中、一稱南無佛、皆已成佛道といふ偈文がある、之は散乱心で一たびも南無佛と稱すれば、皆佛道を成じ了るといふ意味で、稱名の功德を非常に高潮した説である。普門品

の中には觀世音菩薩の名を稱すれば刀杖が段々に折れるとか、大火にも焼かれず大水にも漂はされないその他、種々の災難から免れることができると説いてあります。これは念佛によりて恐怖を離れるといふのと同一思想と見ることが出来る。稱名往生の教義は觀經の説が一番明瞭であります。觀經の中には臨終に南無阿彌陀佛と稱した功德によりて八十億劫生死の重罪を除き、極樂世界に往生することができると説いてあるのであります。これは稱名に滅罪の功德があるから往生が出来るといふ説で、即ち滅罪が往生の理由となつてゐるのであります。前に述べた如く念佛には恐怖を除く功德があり、稱名には亦大火大水等のいろいろの災難を攘ふ功德があると考へられた。斯やうに物質的而も有形的な災難をはらふといふ思想が一轉して精神的の壓迫、即ち無形の罪過を滅すといふ説になつて來たのではなからうかと思ふのであります。兎に角稱名に滅罪の功德があるから淨土往生ができるのであるといふのが即ち稱名往生の教義なのであります。蓋し念佛往生と稱名往生とは淨土教中に於ける二大系統であります。印度では龍樹は稱名往生の系統に屬し天親の思想は念佛往生の系統であります。經文の上では般舟三昧經、無量壽經並に觀經の十三定善は念佛往生を説き、觀經の下品は稱名往生を説いたものであります。此二つの系統が印度已來あつたものであります。支那では御承知の通り北魏時代に曇鸞といふ高僧があらまして、天親の往生につて來るのであります。支那では御承知の通り北魏時代に曇鸞といふ高僧があらまして、天親の往生に

註釋を加へた、處が此の曇鸞は元と三論の人で、龍樹の崇拜者でありますから、天親の觀佛往生の教義を註解する中に、龍樹の稱名往生の説を加味した。一面から見ますと曇鸞は龍樹天親両系の調和を試みたといへますけれども、他面からは此両思想が混然としてあらはれてゐるに過ぎぬともいへる。天台の摩訶止觀常行三昧の説は大体は觀念であるけれど尙稱名を行せさせる。のみならず單に三十二相に付いて觀念を凝らさせるだけでなく、進んで色心不可得の境地まで踏み込ませる遺方である。善導大師は稱名を順彼佛願の正定業とし、觀念を助業として此の二者の位置關係を明かにせられた。日本へ來ましては惡心僧都は觀念の方は功德が勝れ稱名の方は功德が劣つて居る。それゆゑ觀念の出來る者はそれを行すが宜いが、觀念のできない者は劣つた功德でも仕方がない。稱名をやれといふ風に勸めてゐる。所謂觀勝稱劣論を唱へたのであります。法然上人は此觀念といふを總体に排斥するのであります、先年河内の天野の金剛寺で見出された明義進行集（法然の孫弟子敬西房信瑞の作）の中に法然上人は無觀の稱名を勸められたといふことを委しく書いてあるが、無觀の稱名といふのは少しも觀念をまじへず、唯だ口に如來の名を稱するのをいふのである。觀念を凝らすといふことになるごうしても精神の散亂を防ぎ、妄念を止めねばならぬ。處がそれは一般の者には逆も出來るとではない。淨土教は末代の凡夫を救ふが爲めに説かれた教であるから、そんな六ヶ敷とを吾々に向つて要求すべき筈がない。散心念佛といつて

離散亂心で、何の觀念思惟をもまじへず、稱名さへすれば、それで疑ひもなく救はれるといふのが、即ち法然上人の主張であつたのであります。大原問答の起つて來た主たる題目、明遍僧都が遙るく法然上人を訪問して提出した問題も、皆此の觀稱の關係に外ならぬのであります。即ち法然上人は印度以來の二大系統中、觀佛思想を全然排斥して新たに無觀稱名の教義を取つて來られたのである。そこが民衆化した所謂一般の國民的宗教となつた所以で、妄念其儘、現在生活其儘で即ち救ひに與かることが出來るさういふ處に上人の立場があるので、それが民族一般の信仰となつて以て今日に至つた所以であらうと思はれるのであります。

元 始 祭

寛 克 彦

すめみまの天降りたまひし大元を

いや新しく偲ぶ御祭

現身の人のさかしらたちこえて

くにの大本祝ふ吉き日ぞ